
銀魂 英雄篇

VC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 英雄篇

【Nコード】

N4764J

【作者名】

VC

【あらすじ】

ある日、銀時達はテレビ番組を観覧するために大江戸テレビ局に行ったらジョン・マクレーン刑事もびつくりの事件に巻き込まれる。事件は攘夷戦争に端を発するものだった。

ブログ（前書き）

おそらく更新は不定期
閲覧は自己責任でお願いします。

プロローグ

プロローグ

「当たった〜当たったアル」

寒さもすっかり厳しくなった十二月のある日の朝。ここ新宿歌舞伎町に天を突き刺すほどの大声が響き渡った。

ここ歌舞伎町では、夜の仕事をしている人が多いため朝は遅い。だけど、この大声のせいでかなりの数の人が無理やり起こされたのは確実だ。当然、文句の一つや二つあちこちから聞こえてくる。それは、その声の発信本である万事屋でも同じことだった。

「ったく、うるせえなあ朝っぱらから。カリガリ君が当たったくらいでぎゃーぎゃー騒ぐな。コンビニに持ってっても交換してもらえないぞ」

朝と言ってもすでに時計の針は午前十時を過ぎていくというのに、いっこうに布団から出てこようとしないこの男。万事屋の主人であり、この小説の主人公でもある坂田銀時、通称銀さん。昨日、一日中一人桃太郎電鉄をやり抜いたせいで寝不足となり、起きてこれない今の状況を見ても分かるとおり、もしダメ人間協会なるものがあったらまっさきに終身会長に就任するほどのダメダメ人間だ。

「おい銀ちゃん。寝てる場合じゃないヨ。ついに、私がハリウッド女優になる日が来てしまったネ」

そして、今しゃべりながら銀さんの元にかけてきたのが先ほどの

声の主、この万事屋で紅一点の神楽ちゃん。神楽ちゃんもたった今起きたばかりらしく、髪の毛がボサボサのままだ。

「ヤッホーイ」

神楽ちゃんはかけてきたその足で、銀さんの布団の上に勢いよく馬乗りになった。

「おもつ、一体何してるのお前、重いから、早くどきなさい。それと何ハリウツド女優って、お前は病院で記憶を一日しか保てない少女でもやっつてりゃいいんだよ。絵本読みながらゲロゲロ吐いてりゃいいんだよ。だから、おとなしく押入れに帰って夢の世界でエンジョイしてきなさい」

そう言うつと銀さんは上に乗ったままの神楽ちゃんを無視して布団を頭まで被った。だが、被るが早いか、万事屋の破壊神に対して口をすべらしてしまった銀さんの体の上には、無数の拳が降り注いできた。

「こんなレディを捕まえて誰がスター 錦野だこらあ。いいから、さつさと起きやがれこんちくしょーう」

か、神楽ちゃん、レディはそんな言葉使いで、人を連続殴打しないから。あと、錦野旦那さんがよく吐くつてのは、『生ダラ』見続けた人にしか分からないんじゃないかな。

あつ、さすがの銀さんもこの攻撃には耐え切れならしく、布団から顔を出した。

「ちよ、おま、何いきなりオラオラ攻撃してくるわけ。俺スタンド持ってないから、仮面かぶったことないから。ストップ、スト

ツプ〜ゴフツツウ」

銀さんの悲痛な叫びもむなしく、神楽ちゃんのスタンドパワーはロードローラーをも潰しかねない勢いで布団から出て無防備になった銀さんの顔面を襲った。そして、語り部であるこの僕、志村新八が万事屋に着いた時には真っ赤に染まった布団だけが残されており、二人の姿はどこにも見当たらなかった。

……えっちよつと、何で誰もいないの、銀さんどうなったの、今回の小説の主人公だよ、まさかこれで終わりじゃないよね。きつと続くよね、ね。

プロローグ（後書き）

このサイトの使い方がよう分からん

あと、Arcadiaにも投稿しています。

まあ、それだけです

第一話 デブキャラの年齢は判別不能(1)

第一話 デブキャラの年齢は判別不能

「もう、焦りましたよ。着いてみたら血だらけの布団だけが残されているんですから」

もう少しで殺人事件に発展するかと思われた事件だったけど、警察に通報しようと玄関を出た瞬間、外から帰ってきた銀さん達と鉢合わせた僕は、今こうしてコタツでミカンを食べながら事の真相を聞いている。

「まあ、出血した原因はいつものこととして、そんな大量出血する傷をおっておきながら一体何処に行ってたんですか」

「んっ、俺はあれだよ、ほら、今日は月曜日じゃん、だからジャンプをちょっと買いにコンビニまで行ってたんだよ」

「まったく、それが大怪我をしている人の行動ですか…….
つてあれ、あんなに出血した傷なのに、そんな頭に少しの包帯だけで大丈夫なんですか」

布団があれほどの血に染まっていたということはよほどの大怪我だ。それが、あんな頭一周程度の包帯で治療できるはずがない、ならどうして。

はっ、まさか銀さん僕に心配を掛けまいと無理してるんじゃない。き

つとそうだ、本当は動くだけで全身をチャック・ノリスの攻撃を受け続けるぐらいの激痛が走っているに違いない。僕のために、銀さん、あんたって人は、

「おいおい新八君、君一体何年この世界でやってるの。主人公が日常生活の中で大怪我おっちゃあまずいだろ。ビジュアル的にもストリー的にも。だからいくら血が出ていようと、これくらいですぐ治ちゃうんだよ。何なら今この包帯もはずしてみようか、もう傷なんて治ってるからさあ」

全然違った。

「いや、今回小説だから、ビジュアルないから。もう少しリアル路線でいきましょうよ。」

「リアル路線って言ったってお前、リアルを貫いたらこの小説、俺がハローワークに通い続けるだけの話になっちゃうよ。いいのかそれで、数字とれるの」

「そんなリアルはいらねえんだよ、もっと、こうなんか、頭撃たれたら死ぬとか、そういう当たり前の事だけでいいんですよ」

「しょうがねえなあ、分かったよ。じゃあこうしよう。あの布団についてるのは血じゃなくて、よく中学生が寝ているときに出す有り余った青春の情動ってやつだ。まあ色は白じゃないが、似たようなもんだろ」

「いや、似てねえよ、あんな色のものがあんなに出たらもう完全に病気だから、泌尿器科行けよ」

まあ、この人と話をしていたらこっちが疲れるだけで全然先に進まない。しかも話が終わったとたん、買ってきたジャンプを巻末漫画から読み始めているし。

それじゃあ、ここはとなりの神楽ちゃんに話を振って少しテンポを変えてみるか。

「それじゃあ、神楽ちゃんは銀さんと一緒にコンビニに行ったんだ。何かコンビニで買ってきたの」

「……………一向に返事がない。そういえば、さっきから神楽ちゃんはこたつの上のミカンにも手をつけず、うつむいて何かを一心に見続けている。あの神楽ちゃんが、だ。」

「神楽ちゃん、さっきから一体何を見ているの」

「おう新八、よく気付いたな。よくその汚い眼鏡を拭いて見てみ。この選ばれた勇者のみに与えられる栄光というものをな」

どうやら聞いてくるのを待っていたらしく、勢いよく僕の目の前に突き出されたのは一枚のハガキだった。

「ハガキ？ あれ、これ裏がテレビ番組の観覧券になってる。どうしたのこれ」

「この前応募したら当たったネ。凄くねこれ、ねえスゴクね」

「すごいよ神楽ちゃん。でっ何の番組の観覧券なの。パツと見、書いていないみたいだけど」

「『アイ！マイ！インバイン！』って番組ネ」

「ああ、神楽ちゃんが毎週かかさず見ているあの番組か」

「そうアル、先週は愛人が突然家に押しかけてきたときの対処法だったけど、今回観れるのはラーメン屋の主人のーメンの飲み方ネ」

「えっ、神楽ちゃんそんなのを毎週見てたの。それにラーメン屋の主人のーメンって何。ちょっとこの場では言えないけど、もしかしてさっき銀さんが言っていた青春の情動のことじゃないよね、丸の中に濁音入らないよね」

まったく、最近のテレビの内容が視聴率を確保するため低俗なってきたとは聞いてはいたけど、これほどとは思わなかった。そんな生々しい内容を昼間から放送するなんて、倫理委員会は何をしてるんだ。

「……ちょっと今度録画予約しよう。」

「あつ、でもこれ未成年の場合保護者同伴って書いてるけど、どうするの」

「大丈夫、銀ちゃんが連れて行ってくれるヨ。ねえ銀ちゃん」

すると、すっかり会話から外れて寝そべっていた銀さんは顔も向けずに、期待感いっぱい神楽ちゃんの見聞を却下した。

「俺は行かねえよ。第一それいつだよ、どうせ平日だろ。平日は万事屋の仕事が忙しくてそれどころじゃないだろ。だから、そんなもん却下だ却下」

「年中開店休業のくせして、何言ってるんだヨ。それに、銀ちゃん好きな結野アナをお持ち帰りできるチャンスがあるかもしれないネ」

さすが神楽ちゃん。銀さんのやる気を出させるために、銀さんが大ファンの結野アナの話を持ち出すなんて。あっ、さっそく効果が現れ始めたらしく、起き上がってきたぞ。平静を装おうとしてもそわそわしているのは隠せない。

「うーんそうだな、今もう一度考えてみたんだけど、別に俺は行きたくはないよ、だけど子供を楽しませるのも大人の義務っていうし、ここは一つ社員サービスを兼ねて連れて行ってやるのもいいかな。いや、別に俺は行きたくないんだよ」

いくら口では強がりを言っても、効果は抜群だ。

あれ、でもまてよ二人が行くってことは僕は留守番ってことだね。二人は芸能人を生で見に行つて僕だけ留守番。お通ちゃんにもまた会えるかもしれないのに僕だけ留守番。そう考えると何か僕もすっごく行きたくなってきたな。でも今連れて行つてと言うのは何だか恥ずかしいし、二人とも誘ってくれないかな。

でも、この二人がそんなこと考えてくれるかな。

いやっ、断じて否だ。この二人が僕のことを考えるなんて冷麵にりんごを入れるくらいありえない。ここは積極的にアピールしないと。

「それじゃあ、二人で楽しんできてくださいよ。僕は一人で留守番してますから。いや、本当、僕も平日暇なんで留守番くらいしますよ。ものすっごい暇なんで」

少しわざとつばかったかな。でも、鈍感なこの二人にはこれぐらいの積極さは必要だ。さあ、どう反応する。

「そういえば神楽お前さっきコンビニでノート買ってたよな、あれ

サイン用だろ、だったら俺にも少しくれよ」

「しょうがないアルネエ、まあ三枚ぐらいなら分けてあげるヨ。感謝するヨロシ」

おいー、完全無視かよ。それにこいつらサインをただのノートにもらおうとしてるよ。そこは、きちんとサイン色紙を用意すべきだろ。

……なるほど、これを使って攻めたら行けるかもしれない。

「えっ、二人ともノートにサインをもらおうとしてるんですか。それじゃあ駄目ですよ。サインはやっぱりサイン色紙にもらわなくっちゃ。ノートだと付箋があつたり、裏ににじんだりして汚いですからね。それに、色紙を持っていった方が書く方も気持ちがいいですよ」

まず初めにノートをけなしておく。これで二人はノートにサインをもらうのが素人っぽくって恥ずかしくなったはずだ。次は色紙が簡単に手に入り、しかも身近にあることを理解させるんだ。そして、それを餌に僕を連れて行かせる。

「僕も一応お通ちゃんのおっかけをしていますから、常にサイン色紙は十枚は家にあるですよ。まあ、僕は行きませんが、もし行くんだったら分けてあげたのに、いや、ほんと残念です。僕も行くんだったらな」

よし二人ともこつちを見ている見ている。飢えた野良犬のように、餌の入った罠に食いつくんだ。

「何、新八君。もしかして一緒に行きたいの」

「それで、暇を強調したり色紙について語ったアルか。プッ、おかしくねえそれ、すごいけなげじゃねえ」

わ、笑われた。どうしよう、何かすごい恥ずかしいよこれ。どうする、どうするよ僕。

こうなったら最終手段、使いたくなかったけどこれしかもう手はない。

「すみませ〜ん。本当は僕もすつごく行きたかったです。ほんと、強がって、すみませんでした」

土下座。これに勝るものはない。逼迫した状況を看破しようとする必死の姿。にじみ出る悲壮感。この姿に哀れみを感じない人間はいない。さあ、同情の心で僕を連れて行くんだ。

そんな事を僕が考えているのを知らずに二人の表情が今までの馬鹿にしたにやけたものから一変してやわらかなものへと変わった。

「最初から素直にそう言っとけばいいんだよ。変な肩肘を張らずに」

よし、銀さんは陥落した。

「そうヨ、人間素直が一番ネ」

神楽ちゃんも陥落。後は『新八も連れて行く』の言葉を聞くだけだ。

このとき僕はもう勝利を確信し、心の中で八神月に匹敵するほどの笑みを浮かべていた。

後から思うと小説はビジュアルが無くてホント良かった。

「そうそう、そうすりゃ、一緒に連れて行ってやんのによ。なあ神楽」

一瞬にして神楽ちゃんの顔が汚い物を見るような顔に変わる。

「お前は一人で写真でも見て盛ってるよこの駄目ガネが」

一瞬僕の思考は完全に硬直した。

「あれっ……新八くん、そういうことだから留守番よろしく」

「てっ、何だよ。今の話の流れからすると連れて行くのオーケーだろ普通。それに、駄目ガネって何だよ。メガネどっちかという知識的アイテムだろ」

「だから私は素直が一番って言ったネ。今が私の素直な気持ちヨ。でもそんなに言うんなら、メガネだけなら連れて行ってやるヨ」

「何でメガネだけなんだよ、本人を連れて行けよ」

「新八の九十五パーセントはメガネでできてるからメガネだけで十分ネ」

「何だどこのやろう、誰が妖怪メガネ人間だこらあ。食っちまうぞ」

「ああ、やんのか、こらあ、上等だ、こらあ」

恥ずかしながら、頭に血が上った僕たちは、コタツの上に立ったままの状態でこのような応酬を小一時間ばかり続けてしまい、結局僕が持っている色紙十枚全部と酢コンブ二十七枚（三枚はまけさせた）で手を打ってもらった。まあ、ここは気を取り直して、お通ち

ちゃんに会えるかもしれないその日を楽しみに待つことだよ。

第一話 デブキャラの年齢は判別不能(1)(後書き)

1話をいくつかに分割します

第一話 デブキャラの年齢は判別不能(2) (前書き)

場面ごとに区切るので第一話はかなり多くなるorz

第一話 デブキャラの年齢は判別不能(2)

観覧日当日

遂に待望のこの日がやってきた。僕たち万事屋三人組はバスで大江戸テレビ局まで行くことにした。今僕は一人バス停で銀さん達が来るのを待っている。平日のお昼前ということもあってバス停には僕以外の人影は無い。

それにしても遅いな銀さん達。万事屋からここまでそれほど離れていないのにどうしたんだろ、空模様も怪しくなってきたし、ちよつと様子でも見てこようかな。

「お〜い新八」

あの声は神楽ちゃんだ。

「二人とも早くしてくださいよ、バスが来てしまいますって、え〜とちよつとお前から何着てきてんだ」

僕が声のした方向に目をやると、やって来たのは赤と黄緑の二体の未確認生物。そして、その未確認生物が チャピンと ツクスーツを着用した二人だと理解するのにもあまり時間はかからなかった。

「二人ともなんて格好してるんですか。って言うより何でガ ヤピンとム クをチョイスしたの、おかしいでしょ」

「やっぱり芸能人の皆さんに印象残すためには見た目でアピールす

るのが一番だろ。だったらもうムツ　しかなくねえ、って感じになつたんだよ。なあガチ　ピン。」

「うるさいアル。赤い毛玉と一緒にすんじゃねえヨ。スカイダイビングも自転車もできない俺のおまけが。お前はそのパクパク動く口でクルミでも割ってる」

「何だとコラア、誰がクルミ割り人形だ。実を言つとな、前々からお前は気に食わなかつたんだよ。一人で目立ちやがって。いいか、お前なんか・・・・・・・・お前のかあちゃんべそくせして生意気なんだよ」

ムツ　反論できてないし。反論できるくらいのがチャ　ンの弱点知らなかつたんだ。それよりやばいよ、二人とも完全になりきっているし、バスもう来ちゃうよ。ああ、そうこうしているうちにガチヤピ　がムツクに手袋叩きつけてるし。ガ　ヤピン意外と紳士だな、っていうよりジョンブルなのかあの顔で。

「もう、決闘なんて明日にしてくださいよ。さっ、早く脱いでください。そんな格好じゃテレビ局に入れてもらえませんか」

「えっ脱ぐ。でも俺脱いだら生まれたままの姿だけど、大丈夫かな。俺脱いだらやばいよ、ミケランジェロの作品だと思われて海外オークションで五十億とかで落札されるかもしれないよ」

「そんなわけあるか。ってそれより、銀さんそれ直に着てるんですか、蒸れるよね、冬でも蒸れるよねそれ。はあ、もうつつこむのも疲れましたよ。バスももう来ちゃったし、もうその格好でいいんで行きましょう。ほら、神楽ちゃんも突っ立ってないで」

僕はバスに入ると、一番後ろの席に座って後から来る大馬鹿二人組みを待った。幸い他のお客さんはいないけど、運転手さんにあんな奴等の知り合いだと思われるだけでも恥ずかしい。けれど、いくら待っても一向に二人の姿が見えない。どうしたんだろうか。気になった僕は入り口を覗いてみると、そこには入り口の下の方にツクが上の方にチャピンが詰まって、もそもそもがいていた。その姿を見て僕がとるべき行動はただ一つ。

「すみませーん運転手さん、こいつらこのままでいいんで出発してください」

第一話 デブキャラの年齢は判別不能(3)

大江戸テレビ局

そんなこんなでようやくテレビ局近くのバス停に到着した頃には、空はすっかり雲に覆われ雨粒が一つ、また一つと落ち始めていた。僕達は大降りにならないうちに小走りバス停からテレビ局までかけていった。そして、自動ドアを抜けると、そこは10階まで吹き抜けになっているロビーになっており、中心には案の定というか、噴水が置かれていた。僕達が今いるここ大江戸テレビ局は115階、高さ420メートルもある超高層ビルだ。もともとは天人の総合オフィスビルとして建てられたらしいけど、どういういきさつか、今はこの国で一番の大江戸テレビが買い取り、全階を局として使っている。

さてと、まだ集合時間までには30分近くある。ここはひとまず集合場所である一階ロビーで時間になるまで待つとするか。そういえば、僕達以外待っていそうな人は見当たらないけど、他にも応募して当たった人っているのかな。

「ねえ銀さん他にも応募して当たった人達っているんですかね」

僕は物珍しさにあたりを見回しながら、後ろにいるはずの銀さんに声をかけた。

「知らねえよ。そこいらの暇なおっさんたちとか来るんじゃないの。あっ、そこちゃんと並んで」

「何を並ぶんです。って、ええええええ」

振り返った僕の目の前にはムツ とガ ヤピンにサインをもらう人の長蛇の列ができていた。

「お前等まだ着とつたんかいそれ。映像が無いからてっきりもう脱いでると思っただろうが。しかも何、顔の部分だけ脱いで、それムクとかじゃなくて完全に銀さんと神楽ちゃんだよね、サインの意味無いよね」

「いやあ、みんなが欲しい欲しいって言うから、やさしいムツお兄さんは断れないんだよ」

「そうヨ、ムツシユガ ヤピンも同じネ」

そう言いながら手を動かし続けるこの二人。

「二人とも、もう止めてください。これ、立派な詐欺行為ですよ。警察に見つかったら捕まっちゃいますよ」

言い終わると同時に金属のこすれあう高い音がロビーに響いた。

「詐欺、及び器物破損の現行犯で逮捕する」

赤い毛むくじやらの腕に銀色に輝く手錠がかかっていた。ああ、これで万事屋も解散か、そう思いつつ手錠をかけた人を見ると、そこには黒い制服に身を包んだ真選組副長、土方十四郎の姿があった。

「何だお前か土方君。この手錠はどんな冗談ですか。俺は ックだ

よ、詐欺なんかしちゃいねえよ。それに、器物破損って何だよ。俺何も破壊してないし、逆にサインをバンバン中小工場なみに生産しているよ」

確かにそうだ。別に暴れて物を壊したわけでもないし、一体どうして器物破損の罪が加わってるんだろ。

「それは、あれだ。あの、その、純真な子供達の夢をだな、壊した」

えっ

「ええい、とにかく逮捕だ万事屋。さっさと、ついてきやがれ」

土方さんの顔がどんどん赤くなっていく。

恥ずかしいよ、この人今恥ずかしいこと言ったよ。

「まあ落ち着いてくださいや土方さん。今日は楽しいテレビ局見学の日ですぜ」

「そうだぞトシ。総悟の言うとおりだ。今日はせっかく総悟が当てた『アイ！マイ！インバイン！』の観覧日なのに、そんなことでは気分が台無しだ。言われなかったか、家に帰るまでが観覧日ですよって」

沖田さん、それに近藤さんも来てたのか。

「皆さんも当たったんですか。実は僕たちもなんですよ。でも、土方さんだけ制服みたいですけどお仕事ですか」

「ああ、俺はこの二人に無理やり連れて来られただけだ。まあ万事屋、今回は特別に見逃してやるから、俺はもう勤務に戻るぞ。総悟、

「てめえも今日は仕事だろうが帰るぞ」

「安心してくだせい土方さん。ちゃんと有給休暇出しときやしたから。土方さんのを使って」

無表情で親指を突き立てながら喋る沖田さん。この人に常識という言葉は存在しないのか。

「てめえ勝手になにやってくれてんだ。俺の貴重な有給を。しかも何その親指、すっげ〜むかつくんですけど。斬っていいねえ、斬っていい」

「止めないか二人とも。みっともない。江戸の町を守る真撰組隊士の一員として恥ずかしくないのか」

今にも抜刀しそうな土方さん達の間近に近藤さんが割って入る。もしかしてこの人、普段は馬鹿一直線の変態ストーカー男に見えるけど、やる時はやる人なのかもしれない。

「さすが近藤さん局長として厳しいときは厳しいんですね。僕見直しちゃいましたよ」

「いやーそうか、俺ももう三十路近いし、年長者としての責任があるからな。それに義弟の前ぐらいかつこつけなきゃ、だろ」

あれっ、今この目の前にこやかにしている人、僕のこと義弟って言わなかった。僕が義弟ってことはつまり、あれだよな、姉上とこいつがああして、こうして、あ〜〜〜。

「姉上は絶対お前なんかには渡さないからな。それに、そのさわやか3組スマイルはなんだ〜、熱血体育教師気取りか、え〜コラ

あゝ
」

これだけ言っても、やはりゴリラには人語は通じないようで、

「えっ、渡してくれないってことは俺をもらってくれるってことか。
じゃあ俺の名前はこれから志村勲に」

「なるか~~~~~」

怒りに身を任せた僕はこのとき近藤さんの襟首をつかんでかなりの放送禁止用語を叫んだみただけど、恐ろしいことに僕は後ほど銀さんにそのことを聞くまでまったく覚えていなかった。

「銀ちゃん、新八がキャラ崩壊起こしたね」

「見るんじゃないありません。あれが今はやりのキレル子供だよ。普段辛いものばっかし食べると切れちゃうんだよな、やっぱ人間ってのは糖分をとらなきゃいけない生物なんだよ、うん」

怒る僕の姿を見物しながら無責任なことを話す二人を尻目に、ゆつくりとこちらに近づいてくる人影が一つあった。その人影は僕の後ろで立ち止まると声をかけてきた。

「あのー兄弟喧嘩の最中にすみませんが、『アイ！マイ！コンバイン！』の観覧集場所はここでいいんでしょうか」

兄弟という単語に一瞬にして反応してしまう僕。

「誰が兄弟喧嘩じゃわりゃあああ。……あれ、桂さん」

その瞬間、僕が正気に戻るより早く真選組の人達が動いた。三人の中で唯一刀を持っている土方さんが桂さんと正面で対峙し、他の二人が退路を防ぐ形をとる。

「桂っ、のこのことこんなところに来るたあお前も年貢の納め時だな。神妙にお縄につくか、ここで斬られるか選びな」

追い詰められたはずの桂さんだが、表情からは緊迫した雰囲気は伝わってこない。逆に余裕さえ感じるほどだ。

「幕府の犬共か、こんな所にまで網を張っているとは。だが、常に備えを怠らない私を捕まえようとは、まだまだ甘いな」

そう言った桂さんが何か薄黄色の物を地面に投げつけたかと思うと、次の瞬間薄黄色の煙がロビー一面に広がり、同時にコーンポタージュのにおいも広がった。さいわい煙はすぐに収まったけど、煙が晴れるとともに桂さんの姿も僕達の前から消えていた。

「畜生、桂の野郎どこへ行きやがった」

「近藤さん、野郎外に出た気配はありやせん。どうやらこのビルのどっかに隠れたみたいですね」

「よしっ、宗吾は至急応援を呼んでくれ、俺は警備室にかけあって出入り口をかためてもらっ、トシはその間、奴が逃げないように正面の入り口だけでも見張っといってくれ。いいか、奴を捕まえる絶好の機会だ、すぐに行動に移り、奴に逃げる暇を与えるな」

「それじゃあ旦那方、こういふことなんで俺達の分まで楽しんできてください」

そう言って手錠をはずしてくれた沖田さん達新撰組の面々は、それぞれの役割をこなすため散っていった。

「行っちゃいましたね銀さん」

「行っちゃったな。ったく、あいつらいったい何しに出て来たんだあゝそれにしてもあつちいなこの毛皮。あのーすいません、ちよつと背中ofチャック下ろしてくれませんかね」

「うわあああ、何脱ごうとしてるんですか、しかも、サインもらっている人にチャック下ろさせるなんて夢も希望もブチ壊れじゃないですか。それにその下素肌なんでしょ、ミケランジェロ作なんでしょ」

「やばい、つつこみなんてしてる場合じゃなかった。すでに背中ofファスナーに手がかかっている。早く止めないとあらゆる意味で削除されちゃうよ。」

「銀ちゃんが脱ぐならあたしも脱ぐアル。すみませ〜ん、チャック下ろしてもらえませんか」

「ぎゃああああああ、それはだめ〜、法律改正で厳しくなってるんだから、神楽ちゃんは絶対ダメ〜」

僕はその瞬間、卑怯にも自分だけは犯罪者の汚名を着せられないように目をつぶり後ろを向いて他人のふりをした。いったいどれだけの時間がたったのだろ〜、まわりの喧騒には一切変化が無い。普通ならここで悲鳴と怒号が飛び交っていてもおかしくないのに。おかしい、僕は高鳴る胸を押さえつけゆつくりと目を開け銀さんたちの状態を確認するため振り向いた。しかし、そこには普段と同じ着

物の銀さんと、チャイナ服姿の神楽ちゃんがいるだけで、何も法律に触れるような破廉恥な事件は起きていなかった。

「なんだ、良かった。二人ともちゃんといつもの服着てるじゃないですか。僕銀さんの言っていること信じてあせっちゃいましたよ」

「ふう〜、新八、お前は自分の目で見たことばっかし信じ過ぎなんだよ。物事つてのは最終的には心の目で見るもんだ。真実を見極める力つてのは俺たち自身の中にあるもんだからな。だからお前も、もう一度心の目で俺を見てみる。そうすれば、心がすっぱだかの俺が分かるはずだ」

何を言い始めてるんだこの人。まさか全身刺青アートってわけじゃないし。

「はっ、何言ってるんですか銀さん。熱でもあるんですか」

「ちよっ、ばか、お前ノリ悪い〜な。ここはもう少し乗ってくるところだろ。邪眼の一つや二つ開眼して、『これが僕の心の眼です』とか言うところだろ」

「開眼できるか〜僕は妖怪百目ですか、邪王炎殺黒龍波撃てるんですか」

「じゃあ邪眼じゃなくて、邪癌でも発症しろヨこの野郎」

「か、神楽ちゃん、邪癌って何？すつごく嫌な字体なんですけど」

「『アイ！マイ！インバイン！』観覧参加者の方は私の元に集まってください」

そうこうしているうちに集合時間になっていたらしく、担当の人が呼びに来ていた。それにしても、新選組の人達と桂さんがいなくなってしまうたから、いるのは僕たちだけのようだ。

「え、皆さん、といつても三人しかいませんが、まあ、皆さんにはこれから81階のスタジオまで移動してもらいます」

「おいおい、81階ってエレベーター使ってもすげえ時間かかるんじゃないねえ」

「するどい銀さんの指摘が入る。確かに、途中で降りたり乗ったりする人もいるからすごくかかりそうだ。」

「その点は大丈夫です。80階のスカイラウンジまでは直通エレベーターがありますので、それに乗っていただき、80階から各階移動のエレベーターに乗っていただきます」

なるほど、確かに超高層ビルだと一定階への直通エレベーターがあつたほうが効率的だ。

僕はそんな考えを巡らしながらエレベーターに乗りこんだ。

だが、エレベーターの扉が閉まる直前に一本の手が割り込み扉が閉まるのを妨げた。開いた扉の向こうからさつき聞いた覚えのある声が聞こえてきた。

「あつ、すみません。のりまーす」

そう言つて乗ってきた男は、赤い帽子をかぶり、立派な髭をたくわえ、青いオーバーオールを着る長髪の……か、桂さん。

「桂さん何でここにいるんですか、逃げたんじゃないんですか」

僕は上昇するエレベーターの中で、スタッフの人に聞こえないように小さな声で問い正した。

「桂じゃない、カツオだ」

この人まだこのキャラ衣装持ってたんだ。

「いやそうじゃなくて、あれ、エリザベスは今日はいないんですか」

「それがエリザベスの奴、尿道から石がでたらしくてな、今病院に行っている。それにしても銀時まさかお前もこの番組を視聴していたとは驚きだぞ」

「それを言うなら指名手配犯が昼真つからあんな番組を見ている方が驚きだ。お前どんだけ暇なんだよ。もうちょっとちゃんと攘夷活動しろよ」

「おお銀時お前もついに俺と同じくこの国の明日のために戦う決心がついたか」

「今の会話でどうしてそう結びつくんだよ」

たわいもない会話だけが、エレベーター内に響く。

いつもの日常、そう言ってしまうえばそれで終わってしまいそうなそんな日だと思ってた。

その時まででは。

第一話 デブキャラの年齢は判別不能(4) (前書き)

アラビア数字と漢数字が混ざってます。
いつか直すのでそれまでよろしく

第一話 デブキャラの年齢は判別不能(4)

直通エレベーター内

僕達と時を同じくしてもう一つの重要な物語も刻々と進行していた。

「あの芸人達には悪いことしましたね」

15基ある直通エレベーターの一つ、その中で一人の男がしゃべっていた。エレベーター内には真選組の制服を着た男が七人。どの男も首にはテレビ局の入構許可証をぶらさげ、その格好に不釣合いな黒のポストンバッグを一つずつ持っている。さらに、全員の腰には刀が差さっていた。一見すると真選組の局員に見えるが、誰一人としてその黒い制服を着慣れた感じは伝わってこない。

「いくら許可証をいただくためとはいえ、両手足縛ってバンに詰め込みは無いですよ。かなりぎゅうぎゅうに詰めましたからね、今頃やつら新しい性に目覚めちゃったりしているかもしれませぬよ」

先ほどから一人でしゃべっているこの男を除いて他の男達は一切口を開こうとはしない。ただ、思い思いの姿勢で80階へと着くのをじっと待っているだけだ。

「性といえばやっぱり遊郭ですよ。まだ俺この町の遊郭には行ってないんですよ。最近吉原って言う遊郭街が賑わってきているみた

いですし、一度は行ってみたかったなあ、ちくしょう」

そう言うと男はエレベーター内から見下ろすことができる江戸の町に目を向けた。さすがに江戸の中心地区にあるだけあって周りには高層ビルが立ち並んでいる。だが、その急激な発展をよそに二十年前と変わらない街並みも広がっている様子が見てとれる。それらの光景をじっと見続けていると、江戸という町が自分からどんどん離れて行ってしまう感覚に襲われる。それは、物質的な距離だけではなく二度と戻れない過去に対する郷愁をも含んでいるのかもしれない。

「なんか、むなしいなあ」

そうつぶやくと、男は自分の周りにいる仲間の顔を見回した。どの顔も彼が昔からよく知っている顔だ。

「おい、三月みづき、お前はこの国が好きか」

突然扉の近くに立っていた一人が口を開いた。

「いきなりな質問ですねえ。まあ端的に言うとお好きですよ。どんなに俺達を裏切ろうと、どんなに国民を殺そうとも、どんなに誇りを失おうともね。でっ、あなたはどうなんですか隊長。あなたはこの国をどう思ってるんです」

「そうだな、もし国家の概念が土地やそこに住んでいる人々を指すなら、俺はそれらのために十年前に死んでいただろうな。だが残念ながら今俺はこうして生きている。と、言うことは、俺は国を愛していないってことになるな」

「じゃあ何で今からこんなことしようとしてるんです。中島淳隊長」

「まあそれほど気にするな、分かってるだろこんなのただの『言葉遊び』だよ。ただのな」

再び静寂が続く。永遠とも思われる静寂は目的階への到着したことをしらせるベルで終わりを告げた。扉がゆっくりと開きはじめる。それと同時に淳と呼ばれた男はその場の全員に対して語りかける。

「それじゃあみんな、始めるか」

そして、開かれたドアの外に向かって彼等は運命の一步を踏みだした。

79階 テレビスタジオ

ここは79階にあるテレビスタジオ。すでに僕たちがテレビ局についてから一時間あまりが過ぎている。いつもはお昼の生放送番組を撮影するため、芸能人やスタッフで賑わっているが、今は真選組の局員で賑わっている。そして、右へ左へと忙しそうにかけまわる局員の中で土方さんだけは目の前に広げられたテレビ局の見取り図に目を落とし、その副長としての貫禄を示している。そこへ、一人の局員がかけてきた。

「副長、一体何が起こったんです」

「山崎か、遅かったな」

やってきたのは真選組監察方の山崎さんだ。僕と同じようなキャラ設定のはずなのに何故かやおい系二次小説で大人気だ。

まっ、うらやましくなんかないけど。

「簡単に説明すると、このビルの80階と81階が武装した数名によつて占拠された。付け加えて、80階への直通エレベーターのワイヤーは全て切られ、非常階段も爆破されて通れない。だから俺たちはこうして、79階でやつらをぶちのめす作戦を立ててる途中だ。分かったか」

その話を聞いた山崎さんは驚きを隠せなかった。それもそのはず、山崎さんやその他多くの真選組局員は、桂包囲網のため急に呼び出され、たつた今到着したばかりなのだから。だけど、さすがは警察、すぐに現状をより把握するため次の質問に乗り出す。

「それで、人質は何人ぐらいいるんですか」

「刀や銃でおどしているという意味の人質ならゼロだ。80階と81階には人質は一人もいない。奴等、乗り込んだときに全員下に行くと言ったらしい。逃げてきたやつが全員口をそろえて同じことを言っている、間違いないだろう」

「えっ、じゃあ何でこんな所で指を加えて待っているんですか。人質がないなら今すぐにでもそいつ等を捕まえることができるじゃないですか。突入する手段なんていくらでもありますよ。そうだ、へりで屋上から突入したらどうです」

嬉々として語る山崎さんに対して、土方さんは冷静に反論する。

「馬鹿野郎よく考えてみる。『奴等のいる階には』と言ったんだ。81階より上にはまだ数百人が取り残されている。下の状況から考えても7エレベーターと非常階段は潰されているだろう。この状況で80階のいくつかの主要な柱を爆破すればどうなると思う。ただでさえ80階はスカイラウンジで柱が少ない、上の階は自重によって崩れて、あたり一面瓦礫の山だ。奴等は一人も人員を裂かずに数百人の人質を手に入れてるんだよ」

「でもつ、そんなことしたら犯人達だって死んでしまいますよ。考えすぎじゃないですか」

「おい山崎、奴等がエレベーターと階段を潰したってことは、奴等自身の脱出路も潰したってことだ。これがどういうことを意味するか少し考えれば分かるだろ」

山崎さんは少し考えるとその理由に気づいたらしく驚愕の目を土方さんに向ける。

「逃げる気が最初からない。奴ら、ここで死ぬ気なんですか」

「まあ、まだ断定は出来ないがな」

「えつ、それじゃあ俺達何も手出し出来無いじゃあないですか。どうするんですか、これから。桂も捕まえなくっちゃいけませんし」

「今はこっちの方が重要だ。仕方ないが、桂の方は後回しだ。それに、こういう立て籠もりをする連中は必ず要求を出してくる。仲間を解放しろだとか、現金を用意しろだとか、糞みたいな要求をな。だが今回は今までと少し違うようだ。まずは、向こうが動き出すまで持つしかない」

そう言い終わると土方さんは胸ポケットからタバコを一本取り出し、口にくわえ火をつけた。この人ほどタバコをおいしそうに吸う人はジャンプ史上類を見ない。規制の対象にならなきゃいいけど。

「副長、スタジオ内は禁煙ですよ」

「そうですね土方さん。規則もろくに守れない根性悪の土方さんには罰ゲームが必要なようですねえ」

瞬間、土方さんの後頭部に猛烈な衝撃が走り、前のめりに倒れた。

「ありやりや、このさいころ、すげー威力だ」

そこにはやはりと言うべきか沖田さんが立っていた。手には凶器となった巨大サイコロがしっかりと握られている。

「宗吾、てめえ何しやがる」

「何って、『なにがでるかなサイコロ』で土方さんの罰ゲーム決めようとしたら、土方さんが急にさいころの軌道上に飛び出してきたんじゃないですかい。まったく、いくつになってもヤムチャボーイの心が抜けないんですから」

相変わらず無理な言い訳をする人だ。これで土方さんの怒りが収まるはずがない。

「お前、俺の後頭部を完全に狙っていただろうが。それに俺がヤムチャってどういうことだ、それを言うならやんちゃだろうが、やん・ちゃ」

「あつ、すいやせん、言い間違えました。ヤムチャボーイじゃなく、サイバイマンボーイでさあ」

「一文字もかぶってねえじゃねえか。逆にちよつと強くなってるのが余計腹立つ。てかつ、せめて悟空にしるよ、あつ、でも止めた、悟空の悟の字に宗吾の吾って漢字が入っているから止めた。俺ベジータな、ベジータ取った」

ああ、指を差しながら小さい子供のように叫ぶ土方さん。クールな土方さんのイメージがどんどん崩れていく。

「そついや、土方さん。もしかして、万事屋の旦那方も上にいるんじゃないんですかい。確か『アイ！マイ！インバイン！』の撮影は81階でやってたはずですけど」

「その点なら大丈夫だろう、81階にいた奴は全員下ろされたようだし、いくらあいつ等が馬鹿だからと言って、のこのこ人質になるほどの馬鹿じゃないだろ」

「土方さん、馬鹿をなめちゃいけませんぜ。馬鹿は普通の人間が考え付かないことをやるから馬鹿って呼ばれるんです。そうすると、旦那達は完全に大馬鹿の部類ですぜ」

その言葉を聞いた土方さんは一度深く煙草を吸うと、上の照明に向かつてゆっくりと煙を吐き出した。

「そつだな、確かにあいつらは大馬鹿だ」

二人の言葉には見下したり、けなしたりするような嫌な感じは一

切無かった。やはりこの人達もどこか銀さんに一目を置いているらしい。

そんな時、他の局員の声がスタジオ全体に響いた。

「副長に沖田隊長、ちょっとこっちへ来てください。やつら全国放送で要求を出す気です」

二人がテレビの前まで来たときにはすでに声明文が読み上げられはじめていた。さっきまで騒がしかった撮影所はうそのような静けさになり、各々、近くのテレビに釘付けになっている。

今、彼らの目の前に映っている一人の男の顔。その顔を誰もが見たことがあった。その顔は十年以上昔、英雄から逆賊となり、民間人虐殺の罪で処刑されたはずの、元天人討伐軍指揮官、中島淳中將であった。

第一話 デブキャラの年齢は判別不能(5)

81階 男子トイレ

その放送が始まる三十分前。その頃僕達はどこにいたかというところ、81階の男子トイレの個室で僕と桂さんと銀さんと神楽ちゃんの四人で、すし詰めになっていた。外にいる連中に見つからないよう、すでに十分近く、一言もしゃべらずにじっとしている。

正直言つて、この状態はしんどい。何がしんどいかつていうところ、ここが和式トイレだということだ。洋式だったら便座を下ろしてその上に座ることもできるけど、和式だからそれができない。そのため、一人は便器をまたいだ格好でいなければならなかった。そしてまたいでいるのはやはり僕だ。他の三人は左右の壁と扉にもたれかかっている状態だから、三人の視点の中心に僕がいることになる。何かすごく嫌な状態だ。まるで、銭湯の脱衣所で裸の人と服を着た人が出会ったときの裸の人の気持ちだ。現代人とアウストラロピテクスの遭遇だよこれ。早くここから出たい。

「銀ちゃん、何で私達こんなところに入ってるネ」

そうこう思案している内に、男子トイレに入って一番嫌な顔をしている神楽ちゃんが口を開いた。鼻をつまみながらしゃべってるせいで、少し鼻声になっている。

「バカ、お前聞いてなかったのか、この階に刃物や拳銃を持った危ない連中がやってきて、占拠しちゃたんだよ、見つかったら殺さ

れちまうからここに隠れてるんだ。思い出したか」

「でも、何でトイレなんだよ、ここ銀ちゃんが出すゲップぐらいくさいアル」

「おいしい、俺のゲップ排泄物の香りかよ、最近ずっとイチゴ牛乳しか飲んでないからイチゴ牛乳の香りのゲップしかしてないよ俺」

「間違えたあるゲップじゃなくて息だったアル」

「よけいだめじゃん。何、それじゃあ俺、口からいつも排泄物の臭いだしてるの、ケツから物食って、口から排泄してるわけえ、俺って」

「だんだんと白熱してきた二人のバトルに比例して、二人の声も大きくなっていく。」

「ちょっと静かにしてくださいよ二人とも、気づかれちゃいますよいつもの調子で騒ぐ二人、いくら僕が言っても、これもまたいつものように聞く訳がない。」

「まったく、この人達は状況というのを判ってるんだろうか。」

「でも新八、レディが男子トイレに入ってるのはやばいヨ。病気持ちになったらどう責任取ってくれるネ」

急にまじめな顔つきになったかと思うと、言う内容はいつも通りなわけね。

すると、いままで腕を組んで僕達の言動を静観していた桂さんが、いつになく真剣な目をしてしゃべりはじめた。

「リーダーそんなに男子トイレを馬鹿にするでない。男子トイレとは男たちの友情を育む場所だ。学生時代の休み時間、連れションでおたがいの悩みを打ち明けながらする放尿タイム。そのときだけ男達は心の鎧を外し、無防備な状態で本心からの会話を交わすことができるのだ。さらに俺の経験から言わせてもらうと、便所とは食事をすることもできる場所だ。何故か居づらい教室から離れて、一人で食べる弁当、あの味は今でも忘れられん」

・
・
・
・
・
・

「ちょっと桂さんあんた痛いよ、痛い事実を暴露しちゃってるよ」

「何が痛い話だ。逆に俺は『便所飯男』と、尊敬されたニツクネームを付けられていたぞ。そのほかにも、毎朝机の上に菊の花をプレゼントされたりしてな、どうだ、もてもてだろ。はっはっはっはっはっ」

腰に手をあてながら自慢げに話す桂さん。この人の人生、他の人が見たらどんだけ悲惨なものだったんだろう。ここは真実を伝えて世間の厳しさを理解してもらった方が本人のためにいいかもしれない。でも、知らぬが仏っていうし、今この状況でさらにややこしい状態になるのも望ましくない。ここはほおっておいた方がいいよね。

「おいツラ、それはお前、馬鹿に、されてんじゃね。便所って」

おい、空気よめよ。

僕の必死の思考もむなしく銀さんのつつこみが入った。しかも、笑いを必死にこらえながらのつつこみ。

「銀時、お前まで何を言ってるんだ。馬鹿に等されてるわけがなからう」

「でも、菊って確か死んだ人にお供えする花ネ、ツラお前いつ死んだアルカ」

神楽ちゃんがとどめの一撃を入れた。

桂さんの動きが止まり、しばらくの間、耳が痛くなるほどの沈黙が続く。

「畜生お、こんなイジメがある学校体制を作った幕府、断じて許すまじ。必ずや天誅を下してやる」

「そんなことを攘夷活動の原動力にするな——」

硬く握り締めた拳でトイレの壁を殴りながら独り言を口走り続けているこの人の姿を見ていると哀れみを感じずにはいられない。だけど、今はそんなことを言ってる場合じゃない。

「とにかく、いつまでもここにいろわけにはいきません。早くどこか安全な場所に移動しましょう」

その言葉に真っ先に反応したのは、以外にもうちひしがられてたはずの桂さんだった。

なんて立ち直るのが早い人なんだ。

「そつだ、よく言ったぞ新八君。さあ皆の者、江戸城へ進撃し、この腐った世の中に鉄槌を下すのだ」

いきおいよくトイレのドアを開けたかと思うと桂さんは勇み足で出て行き、そのまま廊下まで行こうと、ドアに手をかけた。

だめだ、このまま出て行ったら見つかってしまう。こんな時頼りになるのは、

「ストップだ、この馬鹿野郎」

肉体派つつこみの銀さんだ。その肉体派蹴りつつこみが桂さんの側頭部を直撃した。そのまま桂さんは洗面台の鏡におもいつきし顔面から突っ込んで、そのまま倒れた。

「痛いじゃないか銀時」

頭から噴水のように血を噴出しながら起き上がってきた。

「うるせえ、お前は人の話を少しは聞け。だが新八、出るつたつてどうやって出て行くんだ」

「映画とかでしたら換気ダクトから脱出するってのがよくありますけど、どうします、やってみますか」

「ダイハード。ダイハードアルネ。じゃあ私マクレーンやるアル。さあ何をぐずぐずしているんだ野郎共。ロックハウンド付いて来い。早く隕石に穴を空けなきゃ地球が終わっちゃう」

ノリノリの神楽ちゃんだけど、それ映画間違ってるからね。

「おい、神楽、お前それ何のつもり、えっ。博士か、異常な愛情でもやりたいのそれ。バカッ、今はそんなギャグいららないの、少しはまじめにやれ。それより新八、こんだけ騒いでも誰も来ないってことは近くには奴さん方いないんじゃないかねえか。それだったら換気ダクトなんか通らずとも、どろどろと廊下を通って違う部屋に行こうや」

「そうですね、せめてテレビかラジオがある部屋に行って今どうなっているか情報を得ましょう」

そう決まったら行動は早かった。すぐに僕達は廊下に出て、壁づたいにゆっくりと、でも確実に進んでいった。

「あの、先ほどから血が止まらんのだが」

何か後ろから声が聞こえてくるけど、聞かなかったことにしよう。

「もしもし、聞いてる、血があふれて止まらんのだが」

無視、無視。

「もっつ、さっきから血が止まんないって言ってるでしょ」

たまらず、桂さんが叫ぶ。

「うっせいよツラ、そんなのツバ付けときゃ治るって」

「ツラじゃない桂だ。だが銀時、視界がかすんできたんだが、これでもツバで直るかな」

「ああ、直る、直る。それよりお前、トイレからずっと血の跡つけ

て来てるじゃねえか、ヘンゼルとグレテールがお前は。こんな敵に見つかったら一発でアウトだろうが」

「フツ、心配するな銀時。この血は今俺の頭の上を飛んでいる鳥達
が、飲んで消し去ってくれる手はずだ」

「おいっ、お前幻覚まで見えてるのかよ。鳥なんかどこにいるんだよ。それに何、お前の鳥のイメージって血を飲むの。それ何てホラーだよ、一体どこのペットセメタリーに埋めた鳥だよそれ」

無声音で必死に桂さんの相手をする銀さんだったが、さすがの桂さんもこの出血の量には耐えられなかつたらしく、頭がゆっくりと揺れ始めたかと思うとそのまま前のめりに倒れこんだ。

「あっ、ツラが死んだネ」

「桂さん、ちょっと、銀さんこれ本当に危ないですよ」

「あーあ、お前が今回はリアル路線で行きましよう何て言ったからだ。よし、しゃあねえ、そこの角の部屋に連れて行くぞ」

そう言うと銀さんは倒れた桂さんを背負い、角まで運ぶとそこで立ち止まった。そして、僕に中を覗くようジェスチャーで伝えてきた。

僕はしゃがんだ姿勢のままゆっくりとドアノブに手をかけて回し、少しドアを開いた。

中に人の気配は無い。

「大丈夫です。誰もいません」

僕たちが入ったのはどうやら楽屋らしく、衣装やバッグがそのまま残されている。幸いテレビも置いてあった。

「おい新八、テレビつける。ったく、こんな非常時にあの税金ドロボー共は何やってるんだ」

部屋に入るなり銀さんは桂さんを床に放置すると、椅子に座り、机の上に置かれていたせんべいを食べ始めた。

「銀さん、桂さんそんな所に放置して大丈夫なんですか」

「大丈夫、大丈夫。これくらいで死なねえよ。そんなことより、テレビ早くつける」

テレビのスイッチを入れるといつものニュース画面が流れていた。それは、この籠城事件が発生から何ら進展を見せていないこと、民間人が数百人規模で人質にとられていることを伝えていた。

「まだ何も判ってないみたいですね。それより、桂さん本当に大丈夫ですか」

床の上で桂さんは『OK牧場じゃない、花畑に金銀財宝が・・・』等と、意味のわからないうわ言を口走っている。

「しょうがねえな、いいか新八、ギャグパートではこういう風にして傷を治すんだ」

そう言つと銀さんは桂さんの耳元で語り始めた。

「おいヅラ、よく聞け。昔の人はな瀉血っていつて、悪い血を抜い

て病気を治してたらしいぞ。だから、今お前から出ている血も悪い血だけなんだよ。ほら、悪い血が抜けていって、だんだん調子が良くなってきただろ」

えっ、それが治療。ただの催眠療法じゃ……

「おおお、銀時。悪い血が抜けたおかげでだいぶ楽になったぞ」

ええええええええええ、桂さんがまるで何事も無かったかのように起き上がってきたよ。

「覚えとけ新八、これがギャグパートでの傷の治し方だ。馬鹿は暗示にかりやすいからな。それを利用した画期的な治療方だ」

「あっ、はい。でも、桂さん何か余計なほど元気になってるんですけど。暗示にかりすぎて暴走寸前なんですけど」

元氣を取り戻した桂さんは一生懸命僕の後ろで、『狼牙風風拳』を放とうと神楽ちゃんと練習している。

あのマイナー技を練習している時点でテンション高すぎなんですけど。

あきれながら練習している二人を眺めていると、テレビの中が騒がしくなった。それまでビル前からの中継映像だったのがスタジオへと切り替わった。スタジオ内のキャスターは慌てながら緊急ニュースを読み上げた。『たった今、犯人グループが占拠されている大江戸テレビのチャンネルを使って、声明を出すようです。繰り返しチャンネルを使って声明をだすようです。』いい終わると、画面が現在流れている大江戸テレビの画面に変わった。そこには大江戸ニュースのセットと、セットの前の一本のマイク。そして、一人の男

が映し出されていた。

パツと見こんな大それた事件を起こすような人物には見えない。服装も、上は白いYシャツで、下は黒いズボンと、どこにでもいそうな人だ。だけど、その見たものを射すくめるような眼光と腰に下げている刀は只者ではないことを示していた。

「銀さん、この人が本当にここを占拠している犯人なんですかね」

このささいな僕の疑問に返答は返ってこなかった。銀さんの方に目を向けると、瞬きを忘れたかのように目を見開いた状態で、画面を食い入るように見つめていた。

「おいつツラ、もしかしてこの人は」

いつのまにかテレビを見ていた桂さんも、銀さんと同じく驚きを隠せない表情で画面を見つめていた。

「ああ、銀時、人生てやつは劇的な演出を好むらしい。……俺達の隊長殿だ」

銀さん達の声が少し震えている。何がこの二人をこんなに動揺させるのだろうか。それに隊長って一体どういうことだ。

「隊長って、銀さん達、この人の事知ってるんですか」

少しの沈黙の後、銀さんがテレビから目を離さずにゆっくりと答えた。

「ああっ、俺達に生きるってことを、初めて教えてくれた人だ」

第一話 デブキャラの年齢は判別不能(5)(後書き)

1話終

第二話 死にゆく自分の惨めさは自分が一番よく判ってる(1) (前書き)

「ライ麦畑でつかまえて」のサリンジャーさんが亡くなったそうですね。

老衰だという話ですが、また一人偉大な作家さんがいなくなってしまいました。残念です。

今回から少しだけグロ表現入ります。そのことを了承のうえお読みください。

第二話 死にゆく自分の惨めさは自分が一番よく判ってる(1)

第二話 死にゆく自分の惨めさは自分が一番よく判っている

二十年前 矢沢村

第四歩兵中隊で村に一番乗りの栄光を得たのは酒井小队(第二小队)であった。しかし、この栄光は勇猛奮戦の後に得られたものではなく、天人がすでに村を放棄していたため、無血占領という形だった。占領の伝令を聞き、我々中隊本部は以前からの計画通り矢沢村に本部を移すことになり、主に書類関係で大忙しとなった。ある者など、『我が軍は前面の天人より、屋内の書類を掃討すべきだ』と言いはる始末だ。しかし、俺はどうも書類など細かい作業は苦手なので、ここは中隊長という地位を利用してもらい後のことは部下にまかせて一足先に村に行くことにした。だが、さすがに一人で行くというわけにはいかず、書類から逃げられる幸運な兵士を二名護衛としてつれていくことにした。

我々が村に着いたのは翌日の正午近くだった。村に近づくにつれ、ある臭いが漂ってきた。肺の奥深くまで染み込んでいくような重くくすんだ臭い。初めて嗅いだ時は飯も喉を通らなかつたが、今となつては臭いにおいだとしか感じないようになった。

そう、人間の臭いだ。

この村に二百人はいたはずの村人は五十人程度にまで減っていた。

見えるのは幾つかの山積みになった死体と、その死体の山を築いている生き残った村人と酒井小隊の兵士の姿だけだ。今まで幾つもの村を開放してきたが、どこの村でも似たような光景ばかりだ。

どうやら高度に文明化した社会では宗教の勢いが増すらしく、天人の大半は神の存在を信じていた。やつらの神様は人間を「悪魔崇拜者」として認識しており、悪魔からの救済と、宇宙全体の浄化の名の下に村単位での虐殺が横行していた。もちろん、中には虐殺を止めようとした天人の士官が何匹かいたそうだが、無学で信仰心だけが強い兵を止めるほどの才覚を有していなかったようだ。

その残虐性を表す例としてこのような報告がある。天人は妊婦を見つけると腹を割き胎児を取り出した。その後母親の目の前で胎児の頭を柱に叩きつけ潰し、天人は母親の泣き叫ぶ姿を楽しむと、母親はその場で死ぬまで放置された。また、天人の間で人間の頭部を収集するという行為が流行っているらしく、頭の無い死体が多く見つかっている。天人は適当な人間を見繕うと首を切り落とし、頭蓋骨を得る場合はそのまま頭部を肉が崩れるまで大鍋などで煮つめる。最近はおっぱい燻製が人気らしく、あちこちに作りかけの頭部が地面に掘ったかまどの中に残ったままになっている。さらには食人も行われており、尻や腿、脳や肝臓、はては、心臓までもが好んで食されている。これらの犠牲者の大半は子供であり、天人が子供を優先的に殺すという話はすでに全国に広がっていた。そのせいで天人の進軍上にある村々では、天人に殺されるくらいならと、子殺しも頻繁に行われている。

そんな惨憺たる光景の中、我々をまず出迎えたのは酒井正徳少尉であった。

「中隊長、お早いお着きで」

酒井少尉は形式通りの敬礼を終えると、おおまかに現在の状況の説明に入った。

「村の惨状は見ての通りです。今、村で生き残ちよった男達と部下とで死体を集めをさせちよりますが、なにぶん数が多いのでまだ終わちよりません。それと、ここにいた天人達ですが、村人が言うにはわしらが到着する前日に西に向かって撤退しちよったそうです」

酒井は不精髭をしきりに触りながら口早に説明する。愛用の髭剃りを博打で巻き上げられたと以前愚痴をこぼしていたので、きれいな好きの酒井としては耐えられないのだろう。しきりに髭をさすりながら話を続ける。

「中隊長、ここ最近天人どもが戦わずに逃げるので不思議に思つちよったんですが、奴等何かたくらんどんじゃないでしょうか。わしらの中隊が属しとる大隊だけ左右の味方より突出しちよります。ここで敵が左右に攻勢なんぞを行つたら、わしら敵陣に孤立します。中隊長、大隊本部に掛け合つて一時撤退を具申してくれませんか」

「一介の少尉が軍の作戦へ意見するなんて恐れ知らずもいいところだな。そんなこと俺以外の上官に言うなよ。言つた瞬間に制裁をくらつて営倉行きだ」

「制裁なんぞ初年兵の時に受け慣れちよります。しかし、このことは一応考えちよいて下さい。まあ、そりゃあそつと、天人の身の回りの世話をしちよた奴が一人、重傷ですが生きちよります。今、軍医殿が診ちよりますが、会いますか」

「ほう、生きてたか。そいつはめずらしい。それほど奴らに近いと

ころにいた奴なら何か知ってるかもしれない、一応会つとくか。でっ、そいつはどこにいるんだ」

「今は村長の家に置いちよります。案内しましょうか」

「いや、大丈夫だ。少々村の様子も見て回りたいからな、迷ったらそこいらの奴に聞くよ。少尉もいろいろやることあるだろ。もう下がっていいぞ」

酒井は敬礼を終えると足早に去って行った。去って行くときもずっと不精髭を触り続けている。早くなんとかしないと刀で髭を剃りそうだ。俺は脇差の刃を恐る恐る髭に近づける、ふけ顔で二十代半ばの男の姿を想像し苦笑をもらしながら、その生き残りに会うためにこの村では比較的綺麗な家を探した。その家はすぐに見つけることができた。何故なら戸口に見張りの兵一名が立っていたからだ。そいつに聞くとところによると、生き残ったのは三十代前半の男でかなりの深手ということだった。俺は律儀に着いて来ていた護衛役の二人に死体の片付けを手伝うよう命じると戸を開けた。太陽が真上にあるというのに屋内はうす暗く、軍医が灯しているろうそくの明かりが少しまぶしく感じられるぐらいだった。軍医はろうそくの横で、床の上に寝そべっている男に包帯を巻いているところだった。

「中尉、どうだ、患者の様子は。直りそうか」

加藤軍医（階級は中尉）は包帯を巻き終わると、近づいてきて、小声で話し始めた。

「出血はなんとか止めたが、かなりの暴行をうけたらしくてな、内臓がぼろぼろでいつ、どこから出血するかよう分からんだ。もって数時間つてとこだろ。それより中島、お前今度少佐に昇任したん

だつてな。それなら、わしの所に昇任祝いの酒の一本でも持って来るのが人の道ちゆうもんだろ」

中隊中で唯一俺を呼び捨てにするのは最古参である加藤軍医だけだ。年も二倍近く離れているため、どうも注意しにくく、着任してからずつとこの調子だ。

「今度持っていくよ。大隊長としての肩書きでな。だが、今はそんなことを話しているより、少しでも天人どもの情報が欲しい。口がきけるうちに少し話をさせてもらつぞ」

「おうつ、じゃあわしは治療に使えるもんがないかそこいらの家を見て来るから、患者を頼むぞ。名前は行男だ、坂田行男だそうだ」

加藤軍医は名前だけ伝えると出ていこうとしたが、通り過ぎざまそれまでとは打って変わった真面目な口調で、

「いいか、くれぐれも俺の患者を殺したりするなよ」

と耳元でささやいて出て行った。

あいも変わらず難しい人だ。後数時間の命でも必死に守ろうとするなんて。その思いは、横になっている男に近づくと余計に実感する。震えながら一回一回必死にしている呼吸、焦点が定まらず宙を見つめる目、こんな苦しみの中数時間生きるより、楽に死なせてやった方がどれだけ良いだろう。

そんなどうでもいいことを頭に思い浮かべながら、男に話かけた。

「どうも、坂田行男さん。私は天人討伐軍少佐の中島淳というものです」

薄暗い部屋の中できらきらとした男の目がこちらを向く。

「坂田さん、いくつかあなたに聞きたいことがあるんですが、よろしいですか」

肯定も否定もないがそのまま質問を続ける。

「まず聞きたいのはここにいた天人が何処に行ったか知っているかどうかです。どうです、知っていますか」

だが、期待とは裏腹に男はゆっくりと首を横に振った。

「そうですね、では作戦について何か言ってみませんか。最近奴等の通信網でカルタゴという単語が多く出ています。この言葉に聞き覚えは」

この問いの答えも先ほどと同じだった。

「なるほど、天人共はあのごつい図体には似合わず、情報の扱いは繊細みたいですな」

俺の精一杯の冗談だったが男には聞いている余裕は無いようだ。傷が痛むのか、低くうめき声を出し始めた。さっき巻かれたばかりの包帯が、すでにうっすら赤く染まっている。

「……………よく聞いてください。残念ですが、この傷ではあなたはもう長くありません。何か、最後に言っておきたいことはありますか」

すると、急に男は何かを訴えようと口を動かし始めた。だが、この状態で口がまともに動くはずが無く、何を言っているのか非常に聞き取りにくい。三回ほど聞きなおしてようやく聞き取れた内容は『寺』という言葉だけだった。

「寺がどうした、寺に何かあるのか」

そう聞くと男は一度だけ深く頷いた。頷いた男の目からは涙が流れていた。大の男が泣いているのだ。それは、死に対する恐怖なのか、それとも思い残すことがあるのか、俺にはまったくわからないが、人の泣く姿を見るといつも虚しくなる。

突然、男の口から大量の血が噴き出し、体がのけぞった。恐らく、折れた肋骨が肺を傷つけそこから出血したのだろう。このままでは自分の血で窒息するのを待つばかりだ。俺は腰の刀を抜き、苦しうに体を震わせている男に聞いた。

「このままだとあなたは窒息するのを待つばかりです。楽になりたいですか」

口から溢れる血と流れる涙の中、男は俺の目を見つめてきた。

俺は、そのまま刀を胸に突き刺した。ちゃんと一瞬で意識がなくなる様急所を刺した。突き刺した瞬間、口からの出血が一気に増える。そして、体の動きがだんだん鈍くなってきたかと思うと、男のまぶたはゆっくりと閉じていった。

三十数年間かけて作った、一人の人間の人生が終わった。この男はまさか自分の人生がこんな形で、見も知らない奴に終わらせら

れるとは思ってもいなかっただろう。最後、男と目が合っていた数秒間、あの目にはどんな気持ちがかもっていたのだろうか。助けが間に合わなかったことへの恨みか、それとも、死にゆく自分の惨めさを嘆き、生きていく者を見つめることによって生への執着を見せたのかも知れない。

刀を胸から引き抜き、先ほど巻かれた包帯のまだ白い部分で血を拭き取る。すると後ろの戸口が勢いよく開いた。

「あつ、ようやく見つけましたよ隊長」

戸口の方を見ると、本部に残してきたはずの三月中尉が立っていた。

「隊長、探しましたよ、隊長はまだ中隊長なんですから、次回からはちゃんと場所を細かく伝えといてくださいよ。俺、感悪いから村の半分以上の家回ちゃったんですからね」

「そいつは済まなかったな、今度覚えてたらそうするよ。ところで、何の用だ」

「ああ、そうでした。村中の家を探索しましたが、天人の奴等ゴミしか残してませんね。ある家には俺の身長よりでかい抜け殻がありましたよ。いや、俺達よくあんなのと戦ってるなって再認識させられちゃいましたよ」

にやけながら頭を掻く三月。こいつの小隊にはこの村と周辺の探索をまかせていが結果見つけたのは村人の死体と、天人が残した役に立たないゴミだけらしい。

「収穫無しか。そうだ、この近くに寺はあったか」

「寺ですか。寺なら村を出てすぐのところがありましたけど、完全に廃墟で、何もありませんよ」

「その廃墟に村人が何か隠したらしい。この男が今際に口走ったよ。足元に横たわっている男の死体に目をやる。」

「あれっ、生きてる奴いたんですか」

「ああ、もう死んだがな」

「へえ、あつ、確かに死んでいますね。でも、寺なんかは何があるんでしょうね。味噌や塩なんかがあったら後々重宝しますけど、まあ、そこまでは期待しないでおきましょう」

「まあ、食料がどうかは分らんが、とにかく、何名かに見に行かせてくれ」

「了解です。それじゃあ児玉と波木でも連れて俺が行きます」

「別に士官であるお前自身が行く必要はないぞ」

「いえいえ、これもかわいい部下との交流ですよ」

「まあ、お前がそれでいいなら良いが、途中で天人と遭遇してもできるだけ殺さず連れて来いよ」

「分ってますよ。それでは、行ってきます」

敬礼を終えると三月はすぐに寺へと向かうため、村の外へと足を向けた。行きすがら、村人の死体を一箇所を集めるため死体を引きずっていた児玉と波木の襟首を掴むと、今度は逆に二人を引きずりながら去っていった。

三月は俺より二つ年上のはずだが、どうも無邪気さはまだ失くしてないらしい。それが奴の昇任を阻害している理由なのかもしれないが、それ故に兵からの信頼も厚い。

少しは見習わないといけないのかもな。

そんな心にも無いことをつぶやきながら、俺は村の視察を続けることにした。

第二話 死にゆく自分の惨めさは自分が一番よく判ってる(1) (後書き)

長い間書いていませんでした。

すみません

カルタゴは鈴木貫太郎の言葉が何故か印象に残ったので出しました。

なお、軍の階級や部隊は帝国陸軍を参考にしていますが、

兵器的に日清戦争当時の軍編成にしたいのですが戦時

野戦師団7個ではどう考えても天人の侵攻を食い止めるのは無理ですね。天人にグデーリアンみたいな人物が生まれなかったことを祈るのみです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4764j/>

銀魂 英雄篇

2011年8月24日15時18分発行